BIM導入は、単なるソフト選びではなく「組織の設計」です。
石本建築事務所が運用・教育・協働を軸にどう意思決定し、BIM導入で何が変わったのか。
現場で起きた変化のリアルを伺います。

THE DX BACKSTAGE

建築ＤＸの舞台裏

石本建築事務所 × グラフィソフトジャパン

BIM導入で変わる設計現場。

Presented by Graphisoft Japan

株式会社石本建築事務所
設計部門 建築グループ兼
Digital Innovation Group（DIG）リーダー
菅原 雄一郎
Yuichiro Sugawara

顧客と併走できるプロセス

株式会社石本建築事務所
設計部門 建築グループ兼
Digital Innovation Group（DIG）
長田 純一
Junichi Nagata

社内での議論の質が上がった

石本建築事務所

1927年9月創立の来年100周年をむかえる設計事務所。東京・札幌・名古屋・大阪・九州に拠点を置き、意匠・構造・設備など多分野の専門家が連携する。調査・企画から設計・監理まで幅広く建築に関する業務を行う総合コンサルタント。

飯田　まず、石本建築事務所はどのような会社なのでしょうか。

菅原　石本建築事務所は、都市・まちづくりから建築までを横断し、公共建築を含む多様なビルディングタイプを扱う組織設計事務所です。顧客に寄り添いながら良い建築をつくることに加え、設計業務では「組織としてデザインクオリティをどう高め続けるか」を大きなテーマにしています。拠点も案件も多様だからこそ、設計情報を統合し、関係者間で共有できる状態をつくる力が競争力になります。

飯田　そのクオリティを支える仕組みとして、Digital Innovation Group（DIG）を主宰していると思いますが、具体的に何を担っていますか。

長田　ＤＩＧはデジタル技術を活用して、新しい建築のあり方を追求するチームです。特徴は、単なる導入担当ではなく、「実践」と「探求」を両輪に、テーマごとのＷＧを運用している点です。ガイドライン整備、ソフト更新、教育、レビュー、プロモーションまでを一気通貫でマネジメントします。総勢約30名の意匠・構造・環境のメンバーがプロジェクト業務を兼務しながら、設計の立場でのデジタルデザイン活用を提案しています。さらにＤＤＰという社内プラットフォームで実績やノウハウを閲覧できる形にし、「デジタルが設計からかけ離れない」共通イメージを社内に広げています。

飯田　グラフィソフトジャパンが手がけるArchicadとの出会いは、いつ頃からでしょうか。

菅原　私がArchicadと出会ったのは２００５年頃です。当時は「３ＤはFormZやRhinoでつくり、図面は別」という感覚が強かったのですが、３Ｄモデルを作るのと同時に図面が生成されることに驚きました。さらに、建物を水平・垂直に切断して、２Ｄ・３Ｄコマンドなどでそのまま図面表現まで連動する。ここが原点です。当時から構造・設備設計者に図面やモデルを共有でき、コミュニケーションの促進につながりました。昨今は空間オブジェクト活用やBIMcloudを介したチームワーク促進などに取り組み、デザインクオリティを高める効率的な連携手法を探求しています。

飯田　なぜ今、ＢＩＭ導入が避けられないのでしょうか。

長田　ＢＩＭはソフトの導入ではなく、設計情報を一つのモデルに集約し、検討から共有までを一貫させる考え方です。設計品質を組織として高めていこうとすると、設計のプロセスや判断を共有できる仕組みが必要になります。また、設計段階のプロセスを顧客と共有し、みんなで納得しながら進める流れが主流になってきています。図面だけでは伝えきれない３Ｄや情報を「どう扱い、どう共有するか」。この課題に対してＢＩＭ導入は自然な流れになってきています。

飯田　導入する際に重視した判断軸は何でしたか。

菅原　スキーマティックデザインフェーズで運用しやいこと。操作しやすいビューワーが整っている点です。直感的な操作性に加え、さまざまなソフトとの連携を可能にするOpenBIMの考え方にも共感しました。導入は適材適所に運用し続けられるか、拡張し続けられるか、という判断です。

飯田　今後の展望を教えてください。

菅原　２０２６年度の目標は、「確認ＢＩＭを見据えたＣＤＥビューワーの普及」「新しいデザインやかたちを創出するＡＩ活用」「環境デザインのデジタル化」の３点です。技術導入が目的ではなく、デザインクオリティーを継続的に高める原動力として、常に新しい建築のあり方を追求していきたいです。

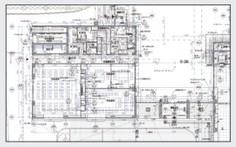
After BIM was introduced

change.1

導入後の変化を伺います。設計者の作業に加え、顧客の社内調整や意思決定、チーム連携まで含め、大きかった変化はどこでしょうか？

菅原　大きな変化は、設計意図をモデルで共有し、顧客と併走できる点です。検討プロセスが見える化され、新しいデザインについて納得のうえで意思決定が進み、合意形成が早まり、手戻り削減とともにクオリティ向上につながります。

長田　非BIMユーザーでも確認できることです。BIMxなどで顧客側が内部検討でき、こちらが説明に費やす手間が減り、議論が前に進みやすくなりました。

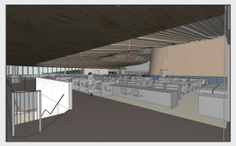


change.2

図面修正や検討のやり直しなど、BIM導入によって「戻り」が減った具体例はありますか？

菅原　モデル起点で整合を保てるため、変更が入っても情報が散らばりません。顧客と同じモデルで判断でき、前提が後から覆りにくい。結果として、確認の往復と修正の連鎖が減り、工程が前に進みます。

長田　運用面ではガイドラインとレビューが効いています。入力の詳細度と表現ルールを揃えることで、拠点や担当が変わっても品質がブレにくい。属人化を抑え、教育も同じ基準で回せるようになりました。



グラフィソフトジャパン株式会社
カスタマーサクセスシニアディレクター
飯田 貴
Takashi Iida

建築家向けBIMソフト「Archicad」を提供するグラフィソフトの日本法人。BIMcloudやBIMxなどの製品群と、導入支援・トレーニング・運用サポート、全国イベントを通じて、設計チームの協働と生産性向上を後押しする。

BIM導入後、まず何が変化？